

# 「同意の調達」を目指す議論に基づく社会科授業構成

— 中学校社会科地理的分野小単元「伊川防災プロジェクト」を事例として —

Composition of Social Studies Lessons Based on Discussions on “Procurement of Consent”:  
A Tentative Lesson Plan for Social Geography Studies in Junior High School on the Unit  
“IKAWA Disaster Prevention Project”

井上昌善  
(愛媛大学)

キーワード：社会科教育，議論，授業構成，同意の調達

Key Words：Social Studies, Discussion, Lesson Composition, Procurement of Consent

## I. はじめに

本研究は、学習者同士の議論のあり方に着目した社会科授業構成を、具体的な単元開発を通して提案したうえで、その効果、特に学習者にどのような変化が見られるかを授業記録等の分析から明らかにするものである。従来の社会科教育学における授業開発研究の一般的な傾向として、具体的な単元を開発し授業構成論の有効性を示すものが多く見られた<sup>(1)</sup>。それらの中には、実践を伴わないプランのみの提案もある。一方で、実践を行いその成果を示した研究であっても、結果だけが示されることが多く、学習のプロセスを検証している研究は限られている<sup>(2)</sup>。したがって、提案した授業の成果ではなく、その授業を通して学習者がどのように成長したかを明らかにする研究が求められていると言えるのではないだろうか。

そこで本研究は、学習者同士の議論をとり入れた授業構成とそれに基づく単元を開発することで、その効果を明らかにする。

本研究において学習者同士の議論に着目する理由は、次の2点である。第1に、近年、思考力・判断力・表現力等の育成が重視されるようになり、その育成方法として話し合いを重視した学習が求められているからである<sup>(3)</sup>。後に言及するように、授業における議論が重視されるにも関わらず、具体的な指導のあり方についての研究は十分であるとは言い難い。第2に、民主主義社会における市民の資質としても、議論をする力が求められているからである。政治学者の山田竜作は、市民自身が「熟議」することが要請されているとして、次のように述べている。

皆に「共通の事柄」の場合には、「市民」全体に影響を及ぼすような何らかの意思決定をしなければならない。「市民」の一員であるならば、その決定に従わなければならないのだから、より納得のいく決定を導き出すためには、公的な場でのしっかりした議論・討論が欠かせまい。これこそが「熟議」というものであろう<sup>(4)</sup>。

このように、選挙を通して代表者に意思を託すだけではなく市民自らが議論に参加することが求められている。つまり、民主主義社会の市民に求められる議論をする力は、少数者などの多様な立場に基づく意見を踏まえつつ、ものごとを公正に判断し、説得力のある意見を形成する力であると言える。

以上のことをふまえ、本研究ではまず、従来の社会科教育学研究の中でも議論に着目した授業開発研究の特質と課題を明らかにする。次に、先行研究の課題を克服しうる議論に基づく社会科授業構成を示す。そして、本研究で示した授業構成論に基づく授業の効果について、実践した授業の記録や生徒へのインタビュー等を分析して、授業による生徒の変化を示すことで明らかにする。

## II. 学習者同士の議論を重視した社会科授業構成論の検討

議論に着目した社会科授業論は、これまでも多く報告されている。その中でも科学的社会認識形成を主張する森分孝治は、探求としての社会科の基本的な学習形態は討論であり、この討論は、他者の批判を得て、「自己の誤りを発見し、知識

を成長させてゆくため」に行われるものであり、「指導された討論」を行うことが重要であると述べている<sup>(5)</sup>。ただし、森分論では、討論を行ううえで重要となる態度については明記されているものの、「指導された討論」の具体的な方法については言及されていない。一方、池野範男は森分とは異なる文脈で市民社会の形成者の育成を目指して、議論を学習原理と位置付けた社会科授業論を展開している<sup>(6)</sup>。池野の社会科授業論は議論を方法原理とし、ツールミン図式を活用した学習によって、社会問題の背景となる社会秩序を批判的に吟味したうえで、再構築させようとするものであった。この池野論の成果をふまえ、議論を通して合意形成能力の育成を目指す授業論を展開しているのが、吉村功太郎や水山光春である。吉村は、合意形成能力の育成を社会科の目標として位置付け、その構成原理を、例えば内部告発者の保護について議論させる単元の開発を通して提案している<sup>(7)</sup>。また、水山は、マレーシアの森林伐採の是非について議論させる具体的な授業プランを示すことで、留保条件に着目した合意形成論を展開している<sup>(8)</sup>。吉村や水山が主張している合意形成論は、その後、多くの論文で引用されており、議論に着目した社会科授業論の到達点と考えられる。しかし、合意形成能力が民主主義社会を担う市民に求められる資質であるかどうかについては、議論の余地があるように思われる。それは、合意を形成することについて、次のような批判が挙げられているからである。

第1に、「実際に普遍的な合意に到達することは不可能かもしれない。現実の合意形成は、たとえ理性的だったとしても、時間の制約上どうしても暫定的にならざるをえないから」<sup>(9)</sup>であり、形成されうる合意は、表面的形式的なものになりやすいという批判である。

第2に、合意は合意できない何かを「排除」することにほかならないため、規範的に望ましいものではないという批判である<sup>(10)</sup>。特に、合意を目指す議論のプロセスの中で「理性的な」主張と「非理性的な」主張を峻別し、後者を排除する可能性がある。

このことから、合意形成を目指す社会科は、価

値多元性を前提とする民主主義社会において限界があると考えられる。今日の学校教育では、一人ひとりの意見をまとめることで合意を目指す社会科論よりも、多様な意見形成を保障する社会科論の検討が求められよう。

このような社会科論を検討するための手がかりとなるのが、民主主義に関する政治学の研究成果である。田村哲樹は、熟議民主主義の考え方に基づいて、「市民社会レベルの民主主義においては必ずしも意思決定を行う必要はない。むしろ重要なことは、国家における意思決定に先立ち、熟議民主主義を通じた『意見形成』を行うことである。」<sup>(11)</sup>と述べている。すなわち、全体の意思を統一することよりも、個々人が自分の意見を持つことが重要なのである。

さらに、熟議民主主義と同じく民主主義を擁護する立場でありながら、先に挙げた合意の可能性を前提とする点を疑問視する闘技民主主義は、意見の対立は不可避とする。闘技民主主義の立場から民主主義論を展開する向山恭一は、合意形成ではなく、意見の対立を前提としたうえで、「同意の調達」が求められると述べている<sup>(12)</sup>。この「同意の調達」という考え方は、意見の多元性を前提としており、他者の意見との同一化を目指すのではなく、自己と他者との対立的な闘技を促すことを特徴としている。合意を形成する過程では、多様な価値の中から社会的に認められるべきものを選択する際に、価値を含む意見に関して他者との完全な一致、同一性が求められ、合意されないものは排除される。これに対して、「同意の調達」では、他者を「対抗者」と認め、それぞれの主張の理由づけを批判的に吟味検証し、合意形成の過程で排除されうる他者との違いを認識することで、これまで考えていなかった自己の意見が拠る立場や価値を自覚化することが重視される。

人々は、ある決定について、「異なる理由に基づいて賛成し得る」<sup>(13)</sup>のであり、自己との差異に配慮することで、自己の意見に疑いを持ち、これによって、「他者との闘技的な尊重関係」<sup>(14)</sup>が生まれるのである。このように、自己と異なる存在としての他者との関係の中で意見を形成する力を育成することは、現実の価値多元化社会において

は重要と言える。社会科授業においても合意形成を目指すのではなく、「同意の調達」を目指す議論を促すことで、多様な価値観を踏まえた意見の形成を保障することが重要になるのではない。

以上のことから本研究では、「同意の調達」を、次のように定義して、それに基づく授業構成論を提案する。

「同意の調達」＝自己と他者の意見の比較を通して、主張の理由を批判的に検討したうえで、両者の違いを保持しつつ他者の納得を得るように、多様な立場を踏まえて自己の意見を再構成すること。

この「同意の調達」を原理とする授業論を提案することで、多様な価値観に基づく意見の形成を保障することができ、合意形成を目指す社会科授業論の課題を克服することができるのではない。

### Ⅲ. 「同意の調達」を目指す議論に基づく社会科授業構成

#### 1. 「同意の調達」を目指した社会科授業構成原理

「同意の調達」を目指す議論に基づく授業構成原理を明らかにするためには、一時間の授業内の議論の場面だけに着目するのではなく、単元全体における一連の議論の指導内容や方法を明らかにする必要がある。

「同意の調達」を目指す議論に基づく社会科授業は、自己と他者の違いを認識したうえで、どうすれば自己の価値観や考え方を変えず、主張の根拠としての理由づけの部分で修正して、他者の同意を得られるかを検討する過程として構成され、それは以下の表1に示す三つの段階となる。

表1 「同意の調達」を目指す授業構成原理

授業構成の段階	「同意の調達」の過程
第一段階 問題に対する自己の意見の形成	主張と理由づけを明確にしたうえで、自己の意見を形成
第二段階 自己と他者の意見の違いの認識	同意の調達のために、自己と他者の意見の違いを確認
第三段階 他者との違いを踏まえた自己の意見の再構成	他者から納得を得られるように、異なる価値観や考え方を認めながら他者の立場をふまえるように、自己の意見を見直し、再構成

(著者作成)

第一段階は、問題について主張と理由を明確に

して自己の意見を形成する段階である。他者の同意を得るためには、まずは自分の主張と理由を明確にして意見を形成することが重要である。ここでは、学習課題についての意見の形成を行う際に、単なる思いつきではなく、資料に基づいて行わせるように留意する。

第二段階は、同意の調達のために、自己と他者の意見の違いを認識する段階である。自己と他者の意見が異なるのは、重視する価値や考え方などが異なるからである。意見の背後にある多様な価値や考え方を認識することは、自己と他者の違いをよりよく理解することにつながる。この違いを認識することで、次の段階において、相手の同意を調達するためには、主張の理由の修正が必要であることに気づかせることができる。

第三段階は、他者との違いを踏まえて自己の意見を批判的に吟味する段階である。例えば、自己とは異なる立場の人を想定していたかどうか、どのような価値や考え方を重視していたのかということを見直すのである。そのうえで、他者との違いを保持しつつ、相手の同意の調達を目指して、自己の意見を他者の立場を踏まえて再構成する。このような学習は、民主主義の持つ排除の可能性という問題を克服し、多元性を保障する社会にふさわしいものと言えるのではない。

#### 2. 「同意の調達」を目指した議論の展開

本節では、本研究で教材として取り上げた防災に関する問題についての学習を進める際に、「同意の調達」を目指す議論がどのように展開されるかを論じる。

第一段階では、防災設備の中でも特に防災倉庫に着目させ、「地域の防災倉庫はどのような場所に設置されているのだろうか」というテーマについて、自己の意見を形成させる。地域の防災に関して、防災倉庫の設置場所が特に重要であり、それをめぐる問題があることを認識させる。その際には、学習対象としての身近な地域の特色を理解させ、防災倉庫に関して疑問に思ったことを整理させる。

第二段階では、その場所に防災倉庫が設置されている理由を探究させ、防災倉庫の設置理由や設置条件を考察させる。これによって、防災倉庫の

設置理由や条件は、地域の人々の多様な考え方を反映したものであることを認識することができる。また、防災倉庫の設置者が重視した価値や考え方の多様性を理解したうえで、どのような考え方を特に重視しているのか、本当にその考え方は妥当なものなのかを吟味させ、「同意の調達」を行うためには、自分の意見をどのように見直せばよいのかについての見直しを持たせる。

第三段階は、「同意の調達」を行うために、他者との違いをふまえて、自己の意見の再構成を行う。ここでは、「新たに防災倉庫を設置するとしたらどこに置くべきか」というテーマについて、地域の人口統計が読み取れる資料や地形の様子がわかる資料を活用して、議論をする。議論の過程において、主張が異なる他者にも同意してもらうためには、自己の意見をどのように見直したり、修正したりしていけばよいのかを考えさせ、できるだけ多くの人の同意が得られるように、多様な立場の人々のことを踏まえて、自己の意見を再構

成するように促す。

以上の段階を経ることで、学習の中で出てきた多様な意見を排除することなく、多くの人の同意を得られる意見を形成することができるだろう。多元性を前提とするという民主主義社会の本質を最大限尊重したうえで、物事を決定する方法を授業で体験できるのが「同意の調達」を目指した社会科授業である。

#### IV. 単元開発—「伊川防災プロジェクト」—

開発した単元は、地域の防災倉庫に関する課題について議論することを通して、地域の課題に対する意見を形成することを目指す。授業の議論では、その場所に防災倉庫を設置すると判断した理由をグループで出し合い、批判的に検討していく。開発単元の概要を示したものが表2である。表2には、単元目標、授業構成、授業時数、主な発問、主な学習内容を示している。

表2 単元「伊川防災プロジェクト」の単元計画—同意の調達を目指す議論に基づく授業構成—

単元の目標	防災設備（特に防災倉庫）の設置理由や設置条件を考察し、防災倉庫の望ましい設置場所に関する自己の主張の理由を、他者の主張の理由としての価値や考え方を踏まえたうえで吟味し、自己とは異なる多様な立場の人の同意を得られるように自己の意見を見直すことができる。		
授業構成	時	主な発問	主な学習内容（*目標、●は学習内容・生徒の意見）
【第一段階】 （問題に対する自己の意見の形成） [防災倉庫の設置場所について、自分なりの意見を持つ]	第一時	○伊川谷ってなんで「伊川谷」！？—「伊川谷」の特徴—	*伊川谷中学校周辺の地域の特色について、ハザードマップの読み取りを通して理解する。 ●伊川によって浸食、堆積することによってできた場所であり、洪水や土砂災害が発生する可能性がある。 *災害時にどのような設備が必要か、特に人の命を守るために重要な防災設備は何か考える。 ●伊川谷の地域には、防災倉庫や消火設備、AEDなどの設備が様々な場所に設置されている。
	第二時・第三時	○フィールドワークで地域を調査して地図にまとめよう！	*フィールドワークを行い、地域にある災害用の設備の種類や設置場所について確認し、疑問に思ったことを発表する。 ●防災倉庫には、発電機や鍋、スピーカーなど様々な器具がしまっていた。防災倉庫を設置している人は誰なのだろうか？防災倉庫の設置理由や設置条件は？
	第四時	○調査したことをいかにして、防災倉庫の設置理由や設置条件について考えよう！	*池上エリア・北別府エリアを防災設備、危険区域に着目して比較し、気づいたことや疑問に思うことを発表する。 ●疑問点として、「防災倉庫の設置者は誰か？」、「防災倉庫の設置場所はわかりにくくて、大人の人も場所がわかっていないのか？」という意見が出た（生徒の意見）。 *地域（池上エリア・北別府エリア）にある防災倉庫がその場所に設置されている理由や伊川谷小学校が浸水想定区域ではない理由について、フィールドワークで得た情報に基づいて予想する。 ●伊川谷小学校は避難場所になっているから防災倉庫があるのではないかと。
	第五時	○防災倉庫から私たちが生活している地域について考えよう！—防災倉庫の設置理由・設置条件に着目して①—	*防災倉庫が設置されている場所について理解する。 ●自分たちの地域に設置されている防災倉庫は、伊川流域の土手沿いと神戸市立地域福祉センターと伊川谷小学校だった。 *防災倉庫の設置者はどのような人なのか理解する。 ●伊川谷防災福祉コミュニティの方である。 *防災倉庫がその場所に設置されている理由についての自分たちの班で考えた意見が、どのような理由（安全性・使いやすさ・認知度・広さ・耐震性などの）丈夫さ・人の多さ・均等な間隔の中で）を重視しているのかについて個人で考え、グループ内で話し合う。 ●小学校は、避難者が集まるから避難者の中にも児童がいるから、緊急時はお父さんやお母さんが絶対にいるわけではないから、児童が行えるようにするため、人が多く集まり、浸水想定区域に入っていないか、説明書きがあったらいいなどと思いました（生徒の意見）。重視した視点や考え方は安全性・認知度・広さ *防災倉庫の設置に関わった地域の方の意見を聞き、自分たちの意見と比較する。 ●地域の人の意見は、安全性や使いやすさ、認知度を重視したものである。
【第二段階】 （自己と他者の意見の違いの認識） [同意の調達を目指す、自己と他者の意見の理由を考察する]	第六時	○防災倉庫から私たちが生活している地域について考えよう！—防災倉庫の設置理由・設置条件に着目して②—	*自分以外に、どのような立場の人のことを想定して防災倉庫を設置したらいいのかを考える。 ●災害弱者の人たちのことを考えて防災倉庫の設置場所を考える必要がある。 *自分たちが防災倉庫の設置者となったら、どのような場所に設置するのかを地域の人口、地形などに着目して判断する。そのように判断した理由について発表する。 ●生産年齢人口が多い地域においた方がいいのではないかと、でも、日中に災害が起きたことを考えると、生産年齢人口が多い地域よりも年少人口が多い地域に置いた方がいいのではないかと、浸水想定区域は外した方がいいのではないかと（生徒の意見）。
【第三段階】 （他者との違いを踏まえた自己の意見の再構成） [より多くの人の賛同が得られる防災倉庫の設置場所について考える]			

（筆者作成）

本単元は、中学2年生210名を対象として社会科地理的分野「身近な地域の調査」の学習に位置付けて行った。

本単元の目標は、防災設備（特に防災倉庫）の設置理由や設置条件を考察し、防災倉庫の望ましい設置場所に関する自己の主張の理由を、他者の主張の理由としての価値や考え方をふまえたうえで吟味し、自己とは異なる多様な立場の人の同意を得られるように、自己の意見を見直すことができるようになることである。今回、身近な地域の防災を取り上げた主な理由は、次の3点である。

第1に、防災に関する学習は小学校で行われており、その内容が中学校地理的分野の学習内容と関連するものが多いためである。小学校の学習成果を生かすことで、防災を視点に地域の特色や課題に関する多様な意見を形成することができる。

第2に、地域の課題についての意見の背後にある多様な価値や考え方を、認識させることができるためである。

第3に、防災についての多様な価値や考え方をふまえ、自己の意見を見直すことが、持続可能な地域を構想するためには重要であることに気づかせることができるためである。

本単元は、六時間の構成となっている。第一時から第四時は、第一段階に相当する。ここでは、身近な地域である伊川谷の特色を資料に基づいて理解をしたうえで、防災倉庫の設置場所について自分の意見を形成する場面である。

第一時では、生徒にとって身近な地域である神戸市西区伊川谷町の地形に着目して、発生しやすい災害について理解し、その災害に対処するためには神戸市が発行しているハザードマップにどのような情報があればよいかを考えさせる。伊川谷という地域には、伊川という明石川水系に属する川が流れており、川の侵食作用によって谷が形成された地域に住宅地が広がっている<sup>(15)</sup>。つまり、この地域は、洪水や土砂災害が発生する可能性がある。このことを資料から読み取り、災害時に必要となる設備は何かを予想させ発表させる。その後、地域のハザードマップを改めて見せてみると、自分たちが必要と判断した防災設備は、マップ上には記載されていないことに気づかせることがで

きる。このような学習を行うことによって、地域の防災設備を調査するフィールドワークに対する学習意欲を高めることができる。

第二・第三時では、前時の学習内容を確認したうえで、調査エリアを北別府エリアと池上エリアの二つに分けて、防災設備について調査するフィールドワークを実施した<sup>(16)</sup>。フィールドワークを実施する前に、フィールドワーク後に議論を中心とする学習を行うことを予告し、次の①～④の指示を出すことによって、地域を調査する目的を理解させた。なお、④は北別府エリアを調査する班にのみ出した指示である。

- ①地域の防災設備の種類や場所を確認すること
- ②防災倉庫が設置されている場所を調査し、その場所の防災倉庫の設置理由を調べること
- ③調査を通してわからなかったこと、調べてみたいことを記入すること
- ④伊川谷小学校が浸水想定区域ではない理由を調べること（北別府エリアのみ）

第四時は、調査したことをいかして地域の防災設備について、疑問に思ったことを発表し、整理する。各班で疑問点を発表させ、まとめることによって、第二段階以降の議論を中心とする学習につなげることができる。授業では、「防災倉庫の設置者は誰か?」、「防災倉庫の場所がわかりにくくて、大人の人も場所が分かっているのか?」というように、防災倉庫に関する疑問点が多く挙げられた。

第五時は第二段階に相当し、防災倉庫の設置場所をめぐる自己と他者の意見の理由の違いについて考察する段階である。ここでは、特に生徒の地域に関する社会認識をより深めるために、防災倉庫に関する専門家の人々の協力を得て、身近な地域の特色を防災倉庫の設置理由や条件についての学習を通して、理解することを重視した。その際、第一段階で生徒たちが持った防災倉庫に関する疑問を生かしながら学習を進めるようにした。地域の防災倉庫は、避難所となっている伊川谷小学校、神戸市立福祉センター、池上の川沿いに設置されている。伊川流域の土手沿いに設置されている防災倉庫は西区消防署が設置したものであるが、伊川谷小学校と福祉センターの防災倉庫の設置者は、

伊川谷防災福祉コミュニティであり、設置場所はコミュニティのメンバーが合議のうえで決定している。これらの設置者の人々に、防災倉庫をその場所に設置した理由についてインタビュー調査を行った<sup>(47)</sup>。インタビュー調査から明らかになったことは、重視している考え方は防災倉庫の設置場所や環境、地域の状況などに着目した多様なもので、設置者の立場によって異なるということである。消防署の人や防災福祉コミュニティの人は、「安全性」を重視している点では共通していたが、消防署の人は「場所のわかりやすさ」、コミュニティの人は「使いやすさ」を重視している点では異なっていた。消防署は地域住民の安全を第一に考え、災害時には中心となって地域住民を守る組織であるため、防災倉庫の「場所のわかりやすさ」がより重要であると考えていた。これに対して、防災福祉コミュニティに所属する人は、消防署の人のように地域の安全を守る専門家ではないため、防災倉庫や機材の「使いやすさ」が重要であると考えていた。このことを学習することによって、防災倉庫には地域の人々の多様な考え方が反映されていること、防災倉庫を設置するには、多くの考え方の中から特定の考え方が優先されて決定されることに気づかせることができる。つまり、防災倉庫の設置場所に関する意見が異なるのは、防災倉庫に反映されている多様な人々の立場に基づく考え方と関係していることを理解させることができる。

第六時は、第三段階に相当する。ここでは、地域の防災倉庫をどこに設置するべきかという課題について、自己と他者の意見を比較し、主張の根拠を吟味し、多くの人の同意を得るために自己の意見を見直す段階である。防災倉庫の設置者となった場合、どこに防災倉庫を設置するべきかという問いについて、班で地域の人口や地形を読み取ることができる資料<sup>(48)</sup>を活用して議論した。議論の際に、考えた意見はどのような立場の人や考え方を特に重視しているのかを振り返らせた。

以上のような防災倉庫の設置場所に関する学習を通して、自己と他者の意見の違いをふまえて、「同意の調達」を実現するために自己の意見を見直すことができるようになると考えられる。

## V. 「同意の調達」を目指した議論の指導及び効果の検証

### 1. 「同意の調達」を目指した議論の指導

本單元における「同意の調達」を目指した議論に関する主な指導（主な指示や発問）は、以下の①～④であった。なお、①～③は第五時、④は第六時で行った。

- ①自分たちで考えた意見はどのような理由や考え方を重視したものか話し合おう。自分たちの意見を振り返ってみよう。
- ②どのような理由や考え方が最も重要だと思うか。選択肢の中から班で二つ選ぼう。防災倉庫を設置する際に重要な理由や考え方は何か。なぜそれを選ぶのか。
- ③実際に防災倉庫の設置に関わった地域の人の意見は、どのような理由や考え方を重視したものか、グループで考えてみよう。地域の人の意見は本当に正しいと言えるのだろうか。地域の人は、どのような立場の人なのか。
- ④防災倉庫の設置場所を考えるうえで、何を覚えておいた方がよいのか。何を重視して考えるべきなのか。

①に関しては、防災倉庫の設置理由や考え方として、「安全性、使いやすさ、認知度、スペースの広さ、丈夫さ、人の多さ、均等な間隔、その他」の中から該当するものを選ばせた。自分たちの意見を振り返らせ、どのような理由や考え方を重視しているのかを理解させた。

②に関しては、地域にある実際の防災倉庫は、どのような理由や考え方に基づいて設置されているのかについての仮説を立てさせた。その後、さらに「安全性という理由については、それは誰にとっての安全なのか」、「人の多さという場合の人とは誰のことを想定しているのか」というように、理由や考え方の多様性に気づかせた。

③に関しては、意見の背後にある理由や考え方の多様性に気づかせるための発問を行った。地域の住民の意見を相対化させるために、「住民の意見は、本当に絶対的に正しいのか」と問いかけることで、今後の地域の未来を想定して防災倉庫の設置基準を問い直すように促した。さらに、生徒自身が防災福祉コミュニティの一員になる可能性

があることを説明し、本単元の学習の意義を確認した。

④に関しては、まず、一人ひとりに防災倉庫の設置場所を考えさせた後、年少人口、生産年齢人口、老年人口の分布が読み取れる資料や浸水想定区域が読み取れるハザードマップを提示し、資料解釈をさせた。次に、班で防災倉庫の設置場所を決定させ、その場所に決定した理由を話し合っ考えるように指示をした。そして、班の意見を発表させた。その際、「どのようなことを重視してその意見を考えたのか」、「考えた意見は本当に防災を実現できるのか」と問い、自分たちの意見を再度振り返らせた。例えば、防災倉庫を設置するのは、生産年齢人口の多い地域と発表した班には、「日中に災害が起きたらその地域は人が少なくなっているのではないか」と問いかけることで、自分たちが形成した意見を見直させ、よりよい設置場所を再度考えるように促した。

## 2. 「同意の調達」を目指した議論の効果

表3 本単元の評価基準と評価結果

	評価基準	結果	全体の傾向
A	地域の課題解決について、異なる立場があることに気づいており、他者の同意を得るために、自己と他者の違いを認め、多様な立場を踏まえた意見を形成することができている。	13% (32名中4名)	全体の傾向として、多くの生徒は、身近な地域の防災倉庫の設置場所を考えるを通して、多様な立場の人々の考え方が存在していることには気づくことができおり、特定の理由（主に地形）に基づく意見を形成していた。これに対して、評価がAだった生徒は、他者の同意を得るために自己とは異なる考え方を他者を想定して複数の理由（地形や持続可能性など）に基づいて意見を形成していた。
B	地域の課題解決について、異なる立場があることに気づいているものの、自己と他者の違いをふまえた意見を形成することができていない。	84% (32名中27名)	
C	地域の課題解決について、異なる立場があることに気づいておらず、理由を明確にした考察ができていない。	3% (32名中1名)	

(筆者作成)

表4 AまたはBと評価した生徒の意見

質問内容	A評価の生徒Xの意見 2017年2月3日記入（第六時終了時に記入）	B評価の生徒Yの意見 2017年2月3日記入（第六時終了時に記入）
◎その場所に防災倉庫を設置すると判断した理由	(ア) 私たちが重視したのは「認知度」です。認知度の高い場所には多くの人が避難することができ、人がたくさん集まります。また、この場所は、生産年齢人口が多い地域です。 <sup>(a)</sup> 災害弱者の人（特に高齢者）を助けに行くことができやすいから多くの人が助かると思います。よって、普段車の通りが多く、小学生や中学生の通学路にもなっていて、 <sup>(b)</sup> 地域にある防災倉庫のちょうど中間の距離にあるこの場所がよいと思いました。中学校とも近いから、いざという時は私たちがすばやく動くことができます。(原文ママ)	(ウ) 二つの防災倉庫の中間地点であり、浸水想定区域に指定されていないから（原文ママ）
◎本時の授業の振り返り（意見・感想）	(イ) 防災倉庫の設置理由について特に重視したのは、誰のために設置すればいいのかということで、このことを考えると、どのような人がどのような立場にいるかで考え方も変わってくるし、 <sup>(c)</sup> 自分だけではなく、他者の意見を聞くことでより学びが深まったと思う。地域の人の意見では、その人のおかれている立場によって、価値観や考え方が違うから、私の防災倉庫の設置理由についての考え方とは違う部分があった。(原文ママ)	(エ) やっぱり <sup>(d)</sup> 倉庫の設置場所は、安全性があった方が危険をおかして行くこともないし、被害を防げるし、使いやすさも大切なんだと思いました。 <sup>(e)</sup> 地域の方の意見を聞いて、なんで中学校に倉庫がないんやろと思ってたけれど、中学校は校区が広く災害になったときに探す時とかに時間がかかって不便ということがわかりました。(原文ママ)

(筆者作成)

特定の理由に基づいて意見を形成していた。特に優れていると評価した（A 評価）生徒は13%であり、これらの生徒は、同意を調達するために、自己とは異なる考え方を持つ他者を想定し、多様な立場を踏まえて複数の理由に基づいて意見を形成することができていた。

表4の生徒Xの（ア）や（イ）の記述内容を分析する。（ア）の下線部（a）から、その場所に防災倉庫を設置する理由として、多くの人が知っていることが重要であり、防災倉庫の設置を検討している場所は、生産年齢人口が多く、災害弱者となりうる高齢者を救出しやすいと考えていたことがわかる。また、下線部（b）から、地域内の倉庫の均等な配置を重視しており、災害時は、自分たちは救助者の立場になるということを想定していると推察できる。（イ）の下線部（c）から、自己とは異なる立場の人の意見をふまえて学習することの重要性に気づいていると推察できる。また、「地域の人」には、多様な立場の人が存在し、立場の違いが、防災倉庫の設置理由に関する考え方の違いに関係していることを理解していることがわかる。

次に、生徒Yの（ウ）や（エ）の記述内容を分析する。生徒Yは、防災倉庫を設置するならば、二つの防災倉庫の中間地点にあり、且つ浸水想定区域ではないところが望ましいと考えていることがわかる。また、（エ）の下線部（d）から、防災倉庫の設置に関する多様な考え方の存在を認識していることがわかる。さらに、下線部（e）から、地域の人の意見を聞くことによって、防災倉庫が、小学校区に設置されている理由について理解を深めることができていくことがわかる。

生徒XをA評価としたのは、防災倉庫の設置という地域の課題について、異なる立場に基づく多様な考え方があることを理解し、救助者としての立場から、災害弱者という自己とは異なる立場の人のことをふまえ、複数の理由に基づいて意見を形成していたからである。一方、生徒YをB評価としたのは、防災倉庫に関する多様な考え方の存在に気づいているものの、自己と他者の意見を比較したり、同意を得るために自己の意見を振り返ったりすることができていないからである。

表5は、第六時に相当する地域の防災倉庫の望ましい設置場所についての議論の一部である。表5の議論は、表3で取り上げた二人の生徒XとYが所属する班のものである。表5中のS2が生徒X、S4が生徒Yである。ここでは特にS2（生徒X）の発言に注目して、議論の効果を検討する。

表5 地域の防災倉庫の設置場所に関する議論

S1: 防災倉庫を設置するのは学校の近く。氾濫地域じゃないところ。小学校の北が一番いいんじゃない。
S2①: <u>でもここ山じゃない？災害時に使いにくい？</u>
S3: 防災設備はできるだけ固めた方がよくない？
T: 設置をする上で、何を知っておいた方がいい？公園の場所だけ知っていればいいの？何を重視して、誰のために設置されるべきだろうか？
S3: 災害弱者のため。避難しにくい高齢者のため。
T: この地域に災害弱者、特に高齢者はどのようなところに多く住んでいるのかみんな知っておいたらいいんじゃない？資料からそれを読み取って引き続き考えてみよう。
S2②: <u>精米所のところがひらけているんちゃうん？</u>
S1: 認知度が無くないか？
S3③: <u>中学生もよく通るからみんな知っているのでは。</u>
S4: <u>スペースある？自販機の裏に置いたら？</u>
S2④: <u>そんなんできるん？</u>
S3: 認知度が高いし、2,3丁目には生産年齢人口が多いから。
S4⑤: <u>伊川谷小学校にも防災倉庫はあるから、中学生が中心となって動けるから米の精米所のところでいい。</u>
S1: 通学路で認知度も高い。中学校と小学校の間に位置しているから。距離感が適当なんじゃない。分布的に中間にある。
S4: 何を重視したのかは。認知度、均等な間隔。

（著者作成）

この班のS2の発言を見ると、①や④のように他者の意見の妥当性について、批判的に検討していることがわかる。また、②の発言からこれまでの学習をふまえて、防災倉庫の設置に適した場所を提案していることがわかる。このことから、S2は、自分たちの班の意見形成に積極的に貢献しようとしていることがわかる。このような発言をS2が行うことができたのは、同じ班の学習者が防災倉庫の設置場所についての自己の意見を持っていること、その意見を一方的に述べるのではなく学習者同士が批判的に吟味しあって、自己の意見をよりよいものにしようとする姿勢を持っていることが関係していると推察できる。この議論の中で、授業者は「批判的に捉えてみよう」という直接的な指示はしていない。ここでは、設置場所について考える際に「何を重視して、誰のために設置されるべきだろうか？」というように、これまで自覚していなかった自己とは異なる立場を想定させ、問題を考えるうえで重視すべきことを確認するように、自己の意見を振り返ることを促



す指導を行っている。これによって、③や⑤の発言からわかるように、防災倉庫の場所を単に知っている者としての「私たち」から、災害時に防災倉庫を活用する救助者としての「私たち」へと意見を形成する際に抱える立場が変容しているのである。つまり、自己と他者の意見の違いを検討し、その違いを認めつつ異なる立場をふまえた自己の意見の再構成を促す指導を行うことが、学習者同士が他者の主張の理由を批判的に検討する議論につながることを示唆された。

### 3. 「同意の調達」を目指した議論に対する生徒の意見

ここでは、本單元において行われた議論を、生徒はどのように考えていたのかという点を、アンケートとインタビュー調査の結果に基づいて検討する。表6は、本單元終了後に行ったインタビューの内容の一部である（T：教師 S：生徒）。また、表7は、年度末に行った授業のアンケートに対する生徒の意見である。なお、ここで示すアンケートとインタビュー調査の結果は、生徒Xのものである。

表6 議論に関する生徒へのインタビュー

2017年2月16日実施	
T:	あなたはアンケートに「グループで話し合いをする学習だったので、みんなの考えも深まったと思う」と書いていますか？どのようなグループ学習をしたから自分だけではなくみんなの考えも深まったと思いますか？
S:	一つの意見に対して、みんなが自分の主張を持っていたから考えが深まった。どうやったらみんながそれいいなと思ってもらえる意見を、納得する意見を考えるかが大切だし意識している。
T:	みんなが納得する意見を考えるように意識するようになったときはいつ？きっかけは？
S:	いつとははっきりいえないけど、先生が多様な意見がいろいろある雰囲気をつくってくれているから、他の班の意見を聞いて、自分たちの班の意見と違うから、なるほどこんな意見もあるなと思った時かな。自分たちも負けたくないと思う。自分たちの班の中では出てないような意見を聞いた時、資料から読み取って深く考えて意見をつくろうと思う。
T:	グループ学習をやっていてよかったと思う時はどんな時だった？
S:	みんなであんなことを考えて一つの意見をつくった時がやっていたと思う。自分が納得できて、みんなが納得できる時かなって思う。
T:	みんなが納得できることを決めていく話し合いは難しいか？
S:	難しい。自分の意見が正しいわけではない、いろんな答えが出てくるのが勉強だと思っている。特に話し合いをしていく中で勉強についてこんなふうになるようになった。
T:	地域に対して関心を持つようになったきっかけは？
S:	防災倉庫の設置場所を考える時に思うようになった。地域について知っておかないといけない。フィールドワークをしている中で、関心がわいた。

(著者作成)

表7 社会科の議論についての生徒の意見

◎今年度の社会科の授業のグループ学習を通して、「他者の主張を踏まえたり取り入れたりして、テーマについての自分の考えを確

認したり、見直したりしながら議論する力」を身に付けることができましたか？「はい」と回答（2017年3月21日記入）

【理由】

社会の防災学習が今年度の社会科の授業でのグループ学習で一番大きい授業だったと思います。防災学習で倉庫の設置場所について議論している時、自分たちの住んでいる伊川谷の地域、そして実際に外に出て学習しに行っていたこともあり、みんなどこにどういう人が多く住んでいるとか、どこに坂道が多いとかここならみんながよく知っているなど仮説と実際の環境とを組み合わせた意見で、議論をしたのでいろいろな意見が出てきて、自分の意見をみんなが納得してくれるようにするのは難しかった。だからこそ、自分の考えを見直すきっかけや人と自分の意見を比べるきっかけにもなりました。（原文ママ）

(著者作成)

表6の下線部から、生徒Xは「みんなが納得する意見をつくること」が議論を行ううえでは重要であり、そのために「意見を見直すこと」や「意見を比べること」が必要であると認識していることがわかる。このように考えるようになったのは、授業者が多様な意見を言える雰囲気をつくることによって、自己とは異なる意見を聴くことができたからである。また、みんなが納得する意見を決める議論は難しいと考えており、自分の意見が正しいわけではないこと、多様な意見が出てくるのが勉強であると考えていることがわかる。このことから、生徒Xは、本単元の「同意の調達」を目指す議論に対して、肯定的に捉えていることがわかる。また、表7の下線部の記述内容から、多様な意見を学習者同士が共有する議論を行うためには、テーマについて自分自身の仮説をつくること＝推論することと事実を確認することが重要であること、他者を納得させるための意見を考えるからこそ、自分自身の意見を見直したり、他者の意見と比較したりすることが重要であることに気づいていることがわかる。

以上のことから、生徒Xの変化には、次のような議論が影響していると考えられる。第1に、多様な意見を認め、主張の理由を吟味することで、他者が納得する意見の形成を目指していたことである。第2に、自己の意見を振り返り、再構成を行う際に、自己と他者との違いだけでなく、他者同士の違いにも着目していたということである。本実践の範囲では、「同意の調達」を目指す議論を通して、自己と他者、他者同士の違いを認め、みんなが納得する意見を形成しようとする態度が育成されていると言えるのではなかろうか。

## VI. 成果と課題

本研究では、「同意の調達」を目指す議論に基づく授業構成を提案し、議論の過程における生徒の意見の変化からその効果を明らかにした。議論の過程において重視したことは、自己と他者との違いを認識させ、その違いを認めつつも、自己の意見を見直させるということであった。A 評価の生徒だけではなく、B 評価の生徒についても、なぜその段階にとどまったのかを解明するため、生徒の意見形成と議論の関係を考察する必要がある。この点については、今後の課題としたい。

### 【注記・引用文献】

- (1) 二井正浩 (2016) 課題研究 I 社会系教科における「授業開発研究」の実証性を問う, 社会系教科教育学研究28, pp.135-136.
- (2) 学習者の学習のプロセスに着目した研究としては、次の岡田の論がある。岡田泰孝 (2016) 「政治的リテラシー」を涵養する小学校社会科学学習のあり方—時事的な問題を「判断規準」に基づいて論争する—, 社会科教育研究129, pp.14-27.
- (3) 以下の文部科学省 webpage 「社会科, 地理歴史科, 公民科における思考力, 判断力, 表現力等の育成のイメージ」を参考にした。  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377052\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377052_02_1.pdf) (2017年3月29日確認)
- (4) 山田竜作 (2010) 「現代社会における熟議／対話の重要性」, 田村哲樹編著『語る 熟議／対話』風行社, p.27.
- (5) 森分孝治 (1978) 『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, pp.164-165.
- (6) 池野範男 (2003) 「新しい社会知にもとづく社会科 市民社会科の構想」, 社会認識教育学会編『社会科教育のニュー・パースペクティブ 変革と提案』明治図書, pp.44-53.
- (7) 吉村功太郎 (2003) 社会的合意形成力の育成をめざす社会科授業, 社会科研究59, pp.41-50.
- (8) 水山光春 (1997) 合意形成をめざす中学校社会科授業—トータルミンモデルの「留保条件」を活用して—, 社会科研究47, pp.51-60.
- (9) 田村哲樹 (2017) 「多数決で決めればよい？

熟議民主主義とラディカル・デモクラシー」, 田村哲樹, 松元雅和, 乙部延剛, 山崎望『ここから始める政治理論』有斐閣, p.102.

- (10) 同上書, pp.102-103.
- (11) 田村哲樹 (2008) 『熟議の理由 民主主義の政治理論』勁草書房, p.127.
- (12) 向山恭一 (2010) 「熟議／対話の限界 闘技民主主義の挑戦」, 田村哲樹編著『語る 熟議／対話』風行社, pp.96-97.
- (13) 前掲書(1), pp.104-108.
- (14) 前掲書(9), p.108.
- (15) 神戸市西区伊川谷町の特徴に関して、以下の webpage や文献を参考にした。 <http://www.city.kobe.lg.jp/ward/kuyakusho/nishi/shoukai/introduction/gaiyou/ikawa.html> (2017年2月6日確認) 伊川流域研究会編著 (2012) 『伊川自然と人とのかかわり—流域6万人のバイオリージョン—』伊川流域研究会.
- (16) フィールドワークを行うにあたって、NPO 法人伊能社中の協力をいただいた。NPO 法人伊能社中については以下の webpage を参照のこと。 <http://www.iknowshachu.org/> (2017年1月17日確認)
- (17) 本プロジェクト実施にあたり、神戸市西消防署消防防災課や伊川谷の防災福祉コミュニティの方に協力をしていただいた。
- (18) 調査対象の地域の人口統計の資料は、以下の神戸市 webpage を参照し、作成した。  
<http://www.city.kobe.lg.jp/information/data/statistics/toukei/jinkou/> (2017年3月29日確認)
- (19) 「地域」の概念に関しては、次の論文を参考にした。吉水裕也 (2008) 変革の時代の地理教育実践の創造—地域を読み解く視点と方法—, 社会系教科教育学研究20, pp.229-238.
- (20) 本単元は、6 クラスに実施したが、時間を確保できた一クラスのみでアンケート調査を行うことになった。アンケート結果より「地域」に関して自己の考え方が、本単元の前で「変化した」と答えた生徒は32名中32名であった。(本論文は、2018年1月に、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科に提出した博士学位論文の一部を修正・加筆したものである。)